東京⇄笠原情報誌　MAIL 版　No.181　2014.2.16

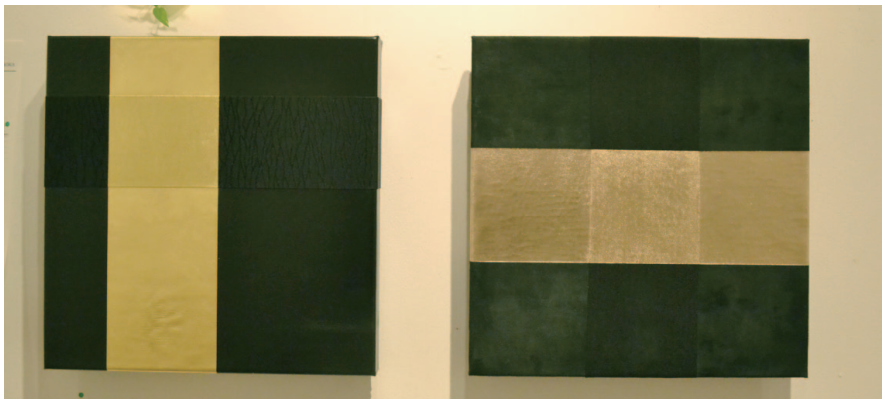
みのEDO

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
TEL 03-5225-6863

特集　タイルとアートの接点をさぐる

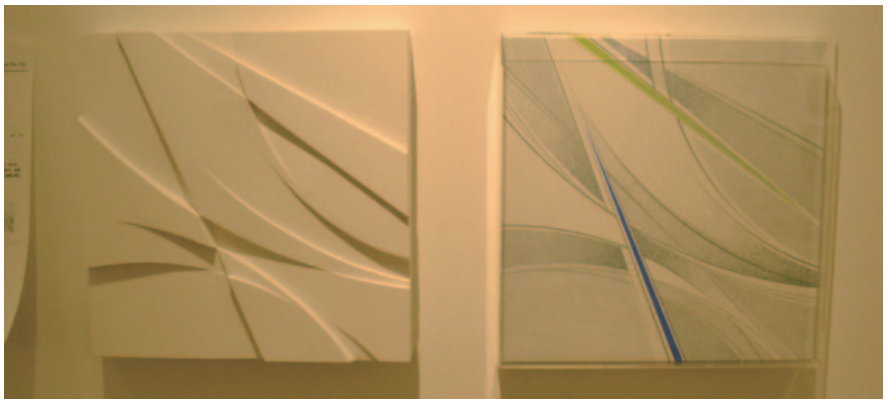
こんなアートタイルがあったらステキだな…?!

オリエ 30 × 30㎝ アート展から



高岡　愛　『Gold on 2』『Kuon on 2』 箔レリーフ（純金箔・革・帯地／純金プラチナ箔・革・着物地）

『Gold on 2』一つの作品のなかで 2 種類の素材の上に箔をおくことで、より素材がもつテクスチャーを感じることができる。同時に箔の輝き、光を楽しめる。
『Kuon on 2』上の作品と同素材でありながらも、表情が違う素材を利用することで、統一感を出しながら、新たな光と素材を楽しめる。



趙　慶姫　『白の諧調－レリーフ A』『白の諧調－版による表現 A』（石膏／紙・木製パネル・アクリルケース）

光の存在の意識化をテーマに、ガラスを主素材に建築空間のアートやプロダクトデザインを手がけてきたが、近年は「白の諧調シリーズ」として作品を展開している。石膏レリーフは光がつくり出す柔らかで微妙な陰影の造形化、版画は紙の白さとグレーの陰影で透明感のある光を表現する試み。どちらもバリエーションの連続より空間への展開を想定している。

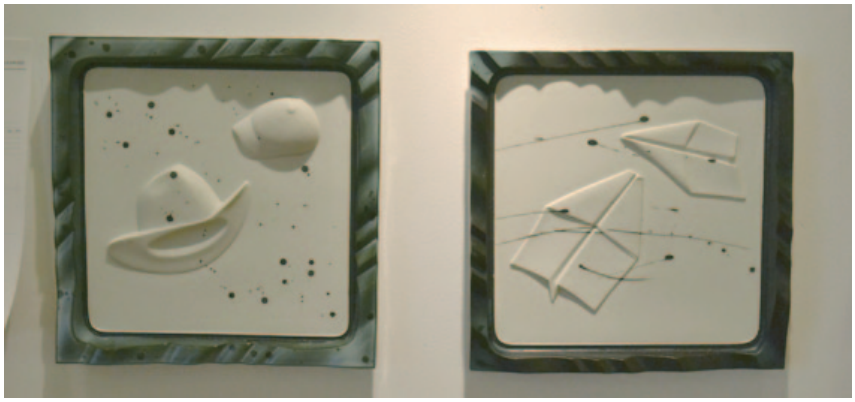
商業施設などのインテリア企画・制作と、家具・アート作品等の輸入・販売を行なっている“オリエ アート・ギャラリー”で昨秋、「Rich Season-30×30㎝アート展」と題する展示会が開催された。あたかも芸術性の高い 30㎝角タイルが一堂に並べられたような趣きの会場で、こんなタイルがあったらステキだなと共感をもった作品に出会った…。
「Rich Season」とは、“実りある季節”の意味で、豊かな人生を指す言葉です。日常生活のワンシーンに、新たな空間づくりのアイデアとして、素材による温もりや、会話のきっかけをもたらす愉しく、やさしさをもったアートの展覧会を企画しました。121 名のアーティストによる絵画、版画、陶、ガラス、テキスタイルなどの新作を中心に、作品サイズを 30 × 30cm と限定し、242 点展示します――。
案内状にそう記されていた。そのなかから、魅力的でこころ惹かれた幾つかの作品を作家のコメントと合せてご紹介する。

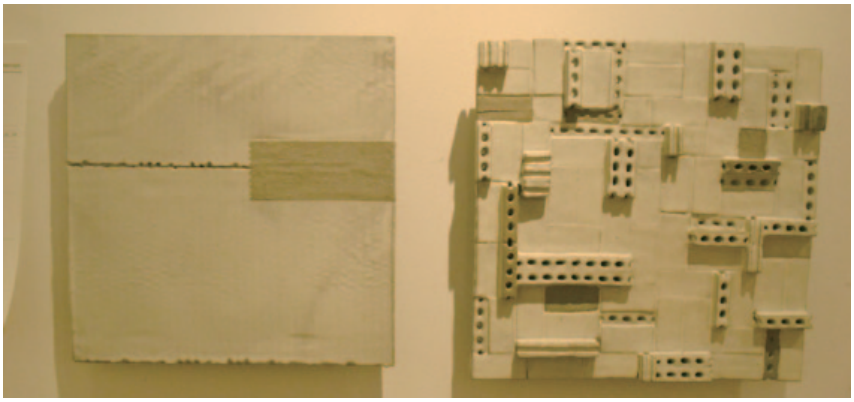
伊藤 五恵　『秋に想う その一』『秋に想う その二』陶・タイル

モチーフは、「菊」（花言葉：高貴）と「貫入釉薬」（中国が発祥の地）。混沌とした時代に、日々無力さを感じながらも一生懸命生きていきたいと思い、土で「願いや想い」を作品に託し、それらが「生きていく」ことを表現し、そのことで人々とつながり、「いま」という時間を共有できたらと願っています。

川辺 忠　『どこまでも…』『空へ』陶磁（鋳込み象嵌）

遠い昔、空き地で友と遊んだ記憶、土手に寝ころがって見上げた空…
幼いころの空はカンバスそのものだった、そんな思いでのモノを 30㎝四方に焼付けました。





三宅 直子　『梱る』『積む』　陶

普段大量生産されるものを手仕事で表現します。何気なく身の回りにある物事をいつもと違う角度から感じてもらいたい。モチーフ；ダンボール／コンクリートブロック

喜井 豊治　『里の春』『雲』　大理石モザイク

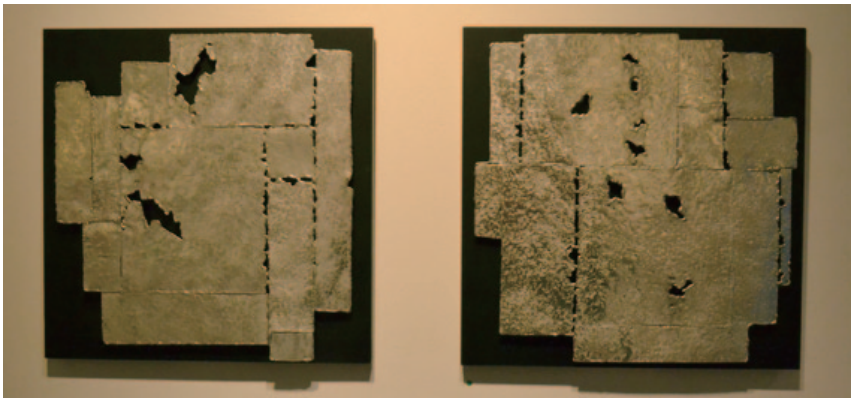
ぼんやり雲を眺めて、安らぐ気分で作品をみてほしい。景色をぼんやり眺める気分が出せたらよい。

中澤 慎一　『Syntax130801』『Syntax130802』レリーフ（木製パネルに箔・合板）

Syntax（統語論）シリーズは、作品が部分ではなく、各部分の Syn（統合）と tax（配列）が重要であることを示しています。

長谷川 久恵　『StreamJ1』『StreamJ2』箔アート（銀箔・紅彩箔・染めガーゼ、パネル仕上げ）

銀箔を使って、長年作品づくりをしています。光と風のかすかなゆらぎ、現れては消えていく変化の中の風景を表現しようとしています。

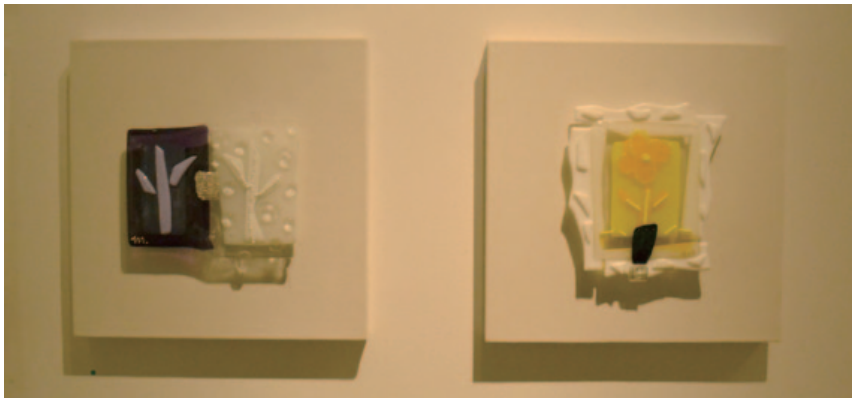


関根 正文　『Composition Ⅰ』『Composition Ⅱ』金工（ピューター、共付け）

片切り彫り、毛彫りなど伝統的な線彫りによる金属素材のピューターならではの輝きを表現した。ダンボール／コンクリートブロック

片山 みやび　『これからの夜の森』『咲いた子』ガラスレリーフ（キルンワーク）

人間は自然とうまく共存することでバランス良く生かされているものと考えています。日々その自然との関わりを作品にしています。



■オリエ アート・ギャラリー

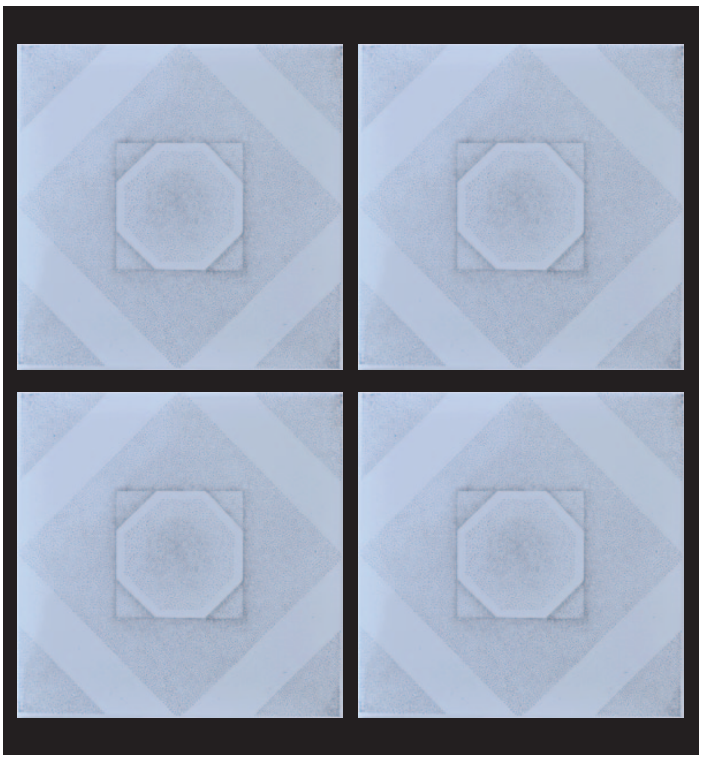
〒 107-0061 東京都港区北青山 2 丁目 9 番 16 号 AA ビル 1 階

TEL 03-5772-5801 FAX 03-5772-5803 営業時間 10:00 ～ 18:30（土・日・祝日休み）

特集　タイルとアートの接点をさぐる

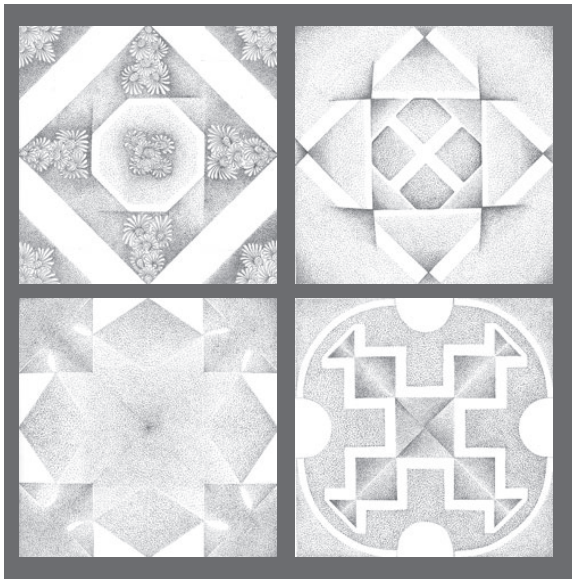
点描のアートタイルがかつてイタリアでつくられた?!

スローアートの画家・加藤芳信 個展から



イタリアで製品化された 200 角タイル（加藤芳信・原画）

加藤さんとジャパンタイムズの川端さん



加藤さんの描いたタイル原画

「アートに触れる、コーヒータイム。」――と銘打ち、神田神保町に店をかまえ多くのファンをもつギャラリー珈琲店・古瀬戸で、昨年 11 月から年末まで、無数の点を打ち続ける作家として知られる加藤芳信さんの個展「東洋の点は動く」が開催された。

かつて “The Japan Times ジャパンタイムズ” で「点を打ち続けて 40 年、スローアートの芸術家」として、すべてが点で描かれる加藤さんの画業を称賛する記事が掲載された。また、1980 年代には点描によるタイル原画を 100 枚も描き、それがイタリア・タイルメーカーによって商品化されたことも、知る人ぞ知るこの画家の足跡である。（写真参照）

古瀬戸での個展では、2011 年の東日本大震災を契機に深い沈黙と祈りのなかで想を得た点画の新作を中心に発表されたが、会期中にはかのジャパンタイムズ紙 論説委員・川端 泰さんとの対談も行なわれた。その概要をお伝えしながら、加藤さんの画業を振り返って作家とタイルアートとの接点をご紹介する。

ふるさと・北海道岩内の雪景色が原点

加藤さんが生れたのは岩内という鮭と鰊の漁場。その海と山に囲まれて過ごした少年時代の結晶が、すべて自分の絵のなかにつまっている。80 代になった現在まで描き続けてこられたのも、18 歳まで過ごしたこの岩内の少年時代の経験が原点、と加藤さんは述懐する。

絵の先生は、岩内が生んだ画家としてつとに知られる木田金次郎。有島武郎の有名な小説『生まれ出づる悩み』のモデルとなった画家で、加藤さんは、雪のなかで絵を描いている先生の手伝いをしながら絵を教わった。ある時、真っ黒な絵具のついた絵筆を油壺で洗う際にパーッ

『一方静寂 萬物静寂』10 mの大作

■ギャラリー珈琲店・古瀬戸
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-7NSE ビル 1 階
TEL 03-3294-7941 営業時間 10:00 ～ 21:00（年中無休）

と黒い飛沫が飛んだ。それが強烈な印象となって記憶に残り、今も甦える。

その後、絵描きの道に進んだ時、あの真っ白な雪のなかの黒い飛沫が思い浮かんだ。それ以来、色を使わないで点だけで空間を掴む絵を描くようになった…。それが1970 年代。以来 40 年以上、点を打ち続けてきたという。

スローアートから生まれたタイル

結果的には、それが「スローアート」ということで評価された。「スローアート」は 80 年代にスウェーデンで提唱され世界に広がった潮流で、ジャパンタイムズ紙が加藤さんのその点画を「スローアート」として紹介した。一つひとつの点が無限に重ねられ、集積された絵の世界にはゆったりとした、たゆとう悠久の時が流れていると――。

80 年代後半には、このスローアートの世界を建築空間に生かせないかと、加藤さんにタイル原画の依頼をしてきた画商が現れ、出来上がった原画を持ち帰っていった。きちんとした契約をしなかったため、やがてイタリアのタイルメーカーから原画を元に製品化されたタイルが送られてきた。結局、それだけで終わってしまったそうだが、それをきっかけに小さな真四角（矩形）のなかに広がる点の世界に興味をおぼえ、何点もタイル原画を描いたという。今もその原画は手もとに残る。（写真参照）

どのようにして点を打つのか

白黒の点から始まって、加藤さんはやがて色彩による点描に取り組むようになる。日本には色を言葉で表現する、外国にはない美しい文化がある。それで日本の色を使った点画に挑戦していく。大自然のなかには無限の色彩があり、光の明暗によるグラデーションがある。その諧調を見きわめられた時に初めて色の点が描けるようになった、と振り返る。

そして人間が生きていくという、その「様」を点の世界のなかに描く。世界では想像もつかない大事件や戦争、天変地異が続発する。それに触発されて、加藤さんは点を打つ。生活のなかで何かショッキングなことに遭遇すると、エネルギーが爆発して体が動く。だからあの 3･11 の大震災があって、その壮絶な出来事に大きな衝撃を受け、『一方静寂 萬物静寂』というギャラリー天井に展示された 10 メートルにおよぶ大作が生れた。

「崩壊した建屋、多くの人が亡くなられた様を見て絶望的

『様一態 世阿弥より』

『タテヤ』

『ジャポニカーマンダラ再生』

『零 ZERO』

な気持ちになった。その思いをここに記しておかなければならない。それが作品づくりの始まりになるんです」と語る。

「東洋の点」とは？

点はできるだけ小さく、線はできるだけ細く、運筆はできるだけゆっくりと、そういう所作を心がけているから、制作にも時間がかかり、それゆえに「スローアート」といわれるのだが、この加藤さんの創作スタイルが西洋のものと全く異なるのは、かつて山にこもり、立ち禅、千日回行などの修行を経て、開眼したという背景にも窺われる。全てのものには神が宿るという日本文化のなかで培われたもので点を描く。そういう確信がある。

「点は初期の頃は偶然の産物として生まれてきました。しかしそれではいろいろな形が生まれて収拾がつかなくなります。それで 100 メートルの点描絵巻をつくってみた。ただひたすら生まれてくる創造力のもとにつくっていった、延々と。その時に何かがわかった。自分を信じてやり通すことでしか、答えが出ないということがわかった。そこから点を打つ自分なりの所作みたいなものが見えてきたんです。」

自分が素直になって事象を見つめていると、表現するエネルギーが出て来る。それを点におきかえて描いていく。そうすると何か不思議な作品が生まれいずるのだ。同じ点は打ちたくない。だからどの作品も点がちがってくる。それで死ぬまで点を打ち続けるという創作をつらぬきたい。そう、画家は静かに語っていた。